

現代日本の建築家の家族観とその建築的提案

奥山研究室 12_00439 阿部 光葉 (ABE, Mitsuha)

1. 序 建築家は住宅を設計する際に、時代状況に対応した家族のあり方を主題とすることが多い。そうした思考に関する建築家の言説からは、核家族が急増した戦後における、家族が団欒できる間取りに関する提案や、少子高齢化が進む近年における、血縁関係にとらわれない居住単位としての新しい家族の捉え方など、住宅や都市の構想に関わる家族に関する認識をよみとることができる。これらは建築家の家族観として位置づけることができ、社会との関係から建築を構想する上で重要な思考であると考えられる。そこで本研究では、家族を主題の中心に据える現代日本の建築家の言説を資料とし¹⁾、建築家の家族観とその建築的提案を併せて検討することで、社会状況に対応した暮らしや住居を提示しようとする建築家の思考の一端を明らかにすることを目的とする。

2. 建築家の家族観

2-1. 建築家の家族観の意味内容 まず資料とした言説において、家族の認識が明確に読み取れる記述を家族観として抽出し、それらの内容を比較検討した。その結果、〈家族に限定した内容〉と〈家族を社会との関係で捉える内容〉(以下、〈限定〉と〈社会〉)に大別できた。〈限定〉は、家族をその構成員の組成や人数で捉えるもの、人間関係の協調性や多様性のうちに捉えるもの、制度や機能、幻想として捉えるものの3つに分類できた。〈社会〉は、家族と社会を連続のなかに位置づけるものと、社会的集団のモデルとして家族を参照するものの2つに分類した(図2)。また、家族観の内容を複数もつ資料もみられたため、その組合せを資料単位で検討した。その結果、〈限定〉の家族の構成員、人間関係、性格に関する内容のみの、**構成員**、**人間関係**、**性格**に関する内容と、それ以外の〈限定〉の組合せによる**構成員+他**、**社会**のみによる**社会**、〈限定〉と**社会**の両方を併せ持つ**限定+社会**の6つの組合せがみられた(表1)。

2-2. 住居と家族との関係性 資料となる言説には、前節で捉えた家族観とは別に、住居と家族の関係について言及するものもみられた。これを住居と家族の関係性として検討した結果、家族が住居に影響を与える**家族優位**、家族と住居が影響し合う**相互関係**、住居が家族に影響を

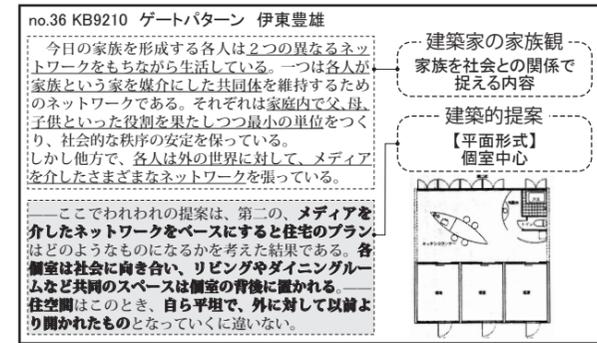


図1. 分析例

家族に限定した内容	家族の構成員 50	構成員の組成 イ 夫婦が中心である親と子供で構成される核家族 三世代を含む子供がいないもの高齢者で構成される	構成員の人数 ロ 多様な構成員を含むノマド的な個人で構成される家族 人数が3人以下
	家族の人間関係 26	協調的關係 ハ 調整された関係共に住む関係 信頼しあう親密な関係	多様な關係 ニ 個が尊重される関係 各人の生活様式が多様な関係 つながりが希薄な関係 時間変化する関係
	家族の性格 26	制度 ホ 家族に固有の秩序 家父長制	機能 ヘ 人を拘束する 人を人間にする 家庭内で家事などの全てを自足する
102	家族と社会の関係 40	連続的關係 チ 住宅内ではなく都市や地域で見受けられる人間関係 個人の生活の中に家族の枠組みと社会の接点共存	参照的關係 リ 社会的最小単位 国家や地球などのあらゆる共同体のモデル 集団主義において最重要の集団

図2. 家族観の意味内容

表1. 資料ごとの家族観の意味内容の組合せ

限定				限定+社会	社会
単一種類	複数種類		構成員+他		
構成員	人間関係	性格	構成員+他	9	25
34	22	12	5	9	25

家族優位 ● 25	相互関係 ○ 7	住居優位 ○ 5
13	5	5
21	17	7
3	4	18

図3. 住居と家族の関係性

表2. 建築的提案の内容

平面形式	住戸配置	居住様式	設備機能	設計過程
Pf 間仕切り・可変性 7	A 8	L 22	F 8	D 6
Pi 個室中心 13	集合住宅の住戸配置	多世帯住宅	用途変更可能な設備	設計時の設計者と施主との関係
Pc 居間中心 9	地域内の住戸配置	シェアハウス等	キッチンの設備	運営活動の兼任
Pr 居間・個室 11		ネットワーク居住	個室の設備	
Pk 台所中心 6				
Po 外部空間 4				

を与える住居優位の3つに分類した(図3)。さらに、住居と家族との関係性の有無と家族観の意味内容の組合せとの対応関係を検討した結果、関係性について言及する場合は**構成員**の割合が大きく、言及しない場合は**人間関係**との割合が大きくみられた。

3. 家族観とそれに関わる建築的提案

3-1. 建築的提案の意味内容 半数以上の資料(66/107)には、2章で捉えた家族観に基づいた建築的提案がみられたため、それらの意味内容について検討した。その結果、【平面形式】【住戸配置】【居住様式】【設備】【設計プロセス】の5つで捉えることができた(表2)。さらに【平面形式】は、**間仕切り・可変性**、**個室中心**、**居間中心**、**居間・個室**、**台所中心**、**外部空間**の6つに分類した。**3-2. 家族観と建築的提案の関係** 前節で位置づけた建築的提案の内容を資料ごとの組合せとし、2章で捉えた家族観の意味内容の組合せとの対応関係を示したものが図4である。家族観の意味内容の組合せごとにみると、**構成員**では特に【平面形式】を含む提案が多くみられ、様々な【平面形式】の提案内容が幅広い年代でみられた。このことは家族の構成員の問題を空間図式の提案により改善しようとする建築家の普遍的思考を示していると考えられる。**人間関係**では【平面形式】以外の提案が多くみられ、特に家族の多様な関係に着目した家族観に基づいた住居様

式が多く提案されていた。これらはシェアハウスやコレクティブハウスなどの新たな住まい方を提案するものであり、近年の単身世帯の増加との対応を示すものだと推察できる。**性格**では、**提案なし**で家族の機能に関する家族観が70年代において多くみられた。これは生き甲斐を生むような家族関係を住居によって作りだそうとする漠然とした提案であり、高度経済成長期後の空虚感に満ちた社会状況との対応を示すものだと推察できる。**社会**では、【平面形式】の個室に関する提案が90年代前半において多くみられた。これらは住居単位を超えた、個人と社会との直接的な関係を創出させる平面図式を提案するものであり、90年代の携帯電話などのコミュニケーションツールが普及した社会状況との対応を示すものだと推察できる。

4. 結 以上、建築家の言説にみられる家族観とそれに基づく建築的提案を捉え、それらの対応関係について検討した。その結果、家族構成に対応した平面図式は時代を問わず提案されていた。また90年代以降、情報技術の発達と単身世帯の増加に伴い、社会と個人を直接つなぐような住居や、家族に代わる共同体のための居住様式や住居形式が提案されていた。これらは社会状況に対応した暮らしや住居を提案する際の建築家の典型的な思考を示すものだと考える。

註1) 現代日本の建築専門誌において、1945～2015年にかけて発表された建築家による論文のうち、タイトルや小見出しに「家族」という言葉が含まれているものを中心に、建築家による書籍に発表された論文を補助的に加えた107の論文を資料としている。



図4. 資料ごとの家族観と建築的提案の関係